

御幸町だより

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町通二条下る

山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『マラの苦い水』

牧師 村島 義也

『出エジプト記』の一場面を学びの箇所として取り上げたい。

「出エジプト」というのは、紀元前13世紀頃のことと考えられるが、エジプトで奴隷化され虐げられていたイスラエルの民が、神の御力によって解放されたという出来事である。その際、民の指導者として立てられたのがモーセであった。「海の奇跡」は有名だ。エジプト王(ファラオ)の軍勢に海に追い詰められ、絶体絶命のピンチ。しかし神は風をもって海を分けられ、救いの道を生じさせられた。民はこれを渡って窮地を脱した。ここには新約の御言葉が木霊する、I コリ10章13節、「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」。

この御言葉はよく過去を顧みる証の中で用いられる。しかし、試練の渦中～我々は本当にこの言葉を抛り所となし得るか。例えば、この御言葉をもって顧みる過去の体験、神の助けや導きへの感謝、それらがたった今、この時の、或いはこれからの試練の中でも信頼して生きるかどうか、生かし得るかどうか。そういうところは問題であるように思う。

イスラエルの民もそうであった。偉大な「海の奇跡」を見、逃れの道を渡って救われた彼らは、歌い、踊り、喜び、主をほめたたえた。取り上げるのはそれに続く場面、出エジプト記15章22～27節。喜びの岸から旅立ち、荒れ野を三日ばかり進んだ頃、民の心には讚美は沈み、苦い思いが湧き始める。水を得ない不安からであった。マラという所に水場があったが、その水は苦くて飲めたものではなかった。この「苦い水」は、恐らく塩分を含んだ地層を通して湧き出た水であったのだろう。24節～困窮の中で主の助けを願うのは悪いことではないが、そうではなく「不平」であったことが問題だ。よほど騒いだのだろう。モーセは対処を迫られ「主に向かって叫んだ」というのだから。

僅か三日…海を分けた神の全能は、今は水が欲しい民には不必要とされた。真に信仰を深めない、信頼を学ばない民である。苦い水は、不平とつぶやき

に満ちた民の心そのものであったとも言えるかもしれない。モーセが主に示された一本の木を投げ込むと、水は甘くなったという。何も甘くまでならなくてもと思うが、不平と呟きに満ちた心というのは当たり前ものを出しても苦く味わうものだ。甘くもなければおさまらなかつたというところか。苦い水を変えられるこの奇跡に当たって、神はこのようにご自身を示された、「わたしはあなたをいやす主である」。主の癒しは、我々の病や悲しみや失望に対するばかりではなく、我々の罪や心の苦さにも働きかける御業であると思うのである。水の苦い・甘いとくればヤコブ書の言葉を思い出すのもいい(3章9～12節)。我々は矛盾だらけの人間だ。我々は皆癒しを必要とする者だ。

さて、「マラの苦い水」のエピソードにはこんな落ちがつく。小さな水場を囲んでごちゃごちゃ言って、わざわざ水を甘くしてもらってようやく歩き出すと、程なくして彼らはエリムという場所に至る。何とそこは、木陰も水も十分な、ナツメヤシの茂る豊かなオアシスだったのだ。つまり、神はちゃんと備えていて下さったのだ。途中で疑い、立ち止まらずともよかったのだ。エリムに至って、あのマラの甘い水は、民にとってはちょっと皮肉な後味の悪いものとなった。途中で疑い、立ち止まる～その分旅路は遅れ、喜びは遅れる。

そういう訳だから、もう一度あの御言葉を心にはっきりさせよう、「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」。さらにヘブライ10章35～36節、「だから、自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです」。

マラの水は苦くても、そこで躓いちゃいけない、不信仰に陥ってはいけない。もう少し、その先に、神はエリムを備えられる。エリムは「神が宿っている木」という意味だそうだ。